

ALLAN

ALLAN

HOLDSWORTH

HOLDSWORTH

1985 JAPAN TOUR

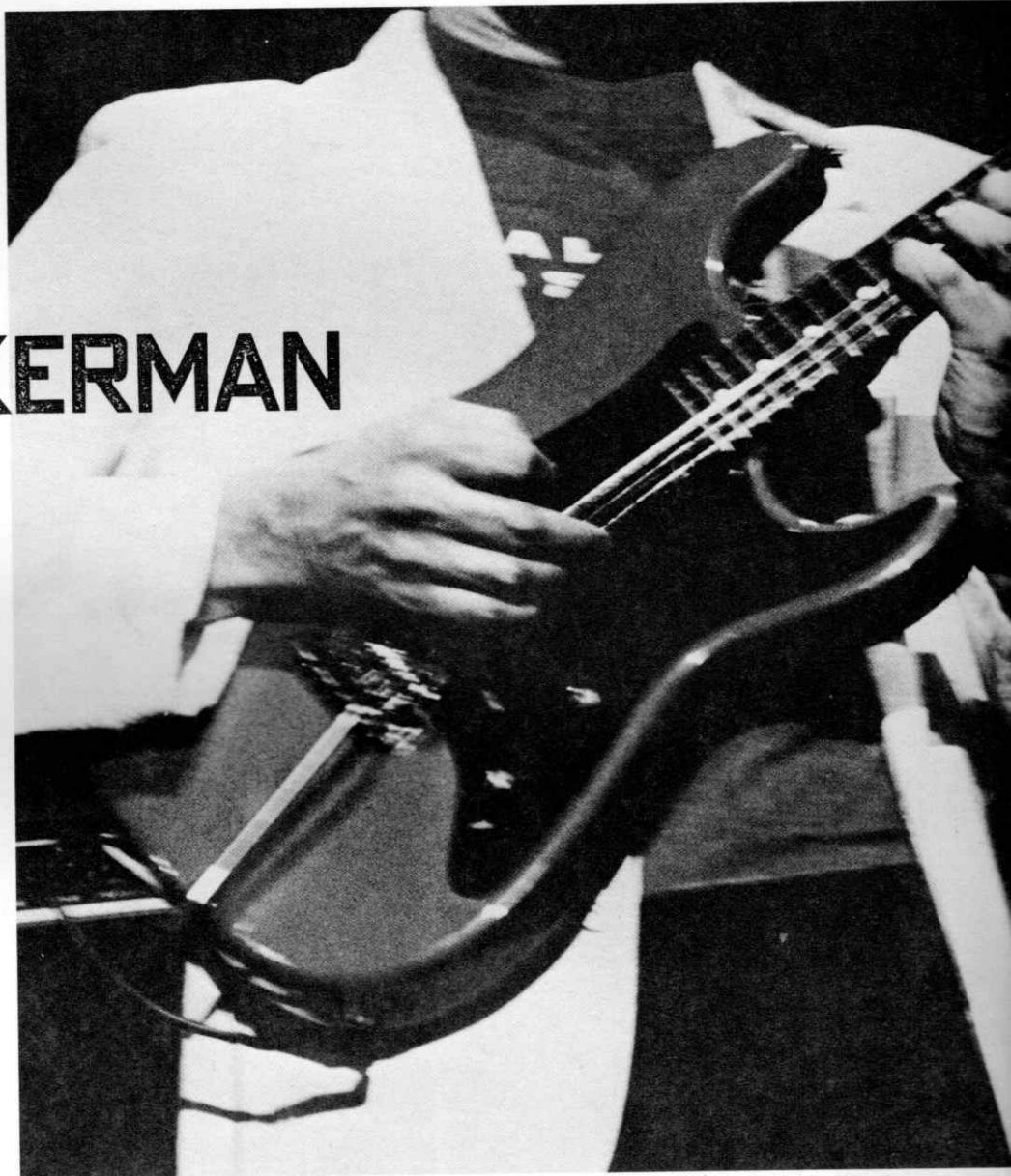
LEZZOZZE

guitar

ALLAN HOLDSWORTH

drums

CHAD WACKERMAN



SCHEDULE

- 3/12 TUE 6:30PM Tokyo Nakano Sun Plaza**
- 3/13 WED 6:30PM Tokyo Nakano Sun Plaza**
- 3/14 THU 6:30PM Nagoya Kinro Kaikan**
- 3/17 SUN 6:00PM Tokyo Nakano Sun Plaza**
- 3/18 MON 6:30PM Osaka Kosei-Nenkin Kaikan**

bass guitar
JIMMY JOHNSON

keyboards
GORDON BECK

GARY LO CONTI:MANAGER
N:CREW/EDDY CORALNIC:CREW

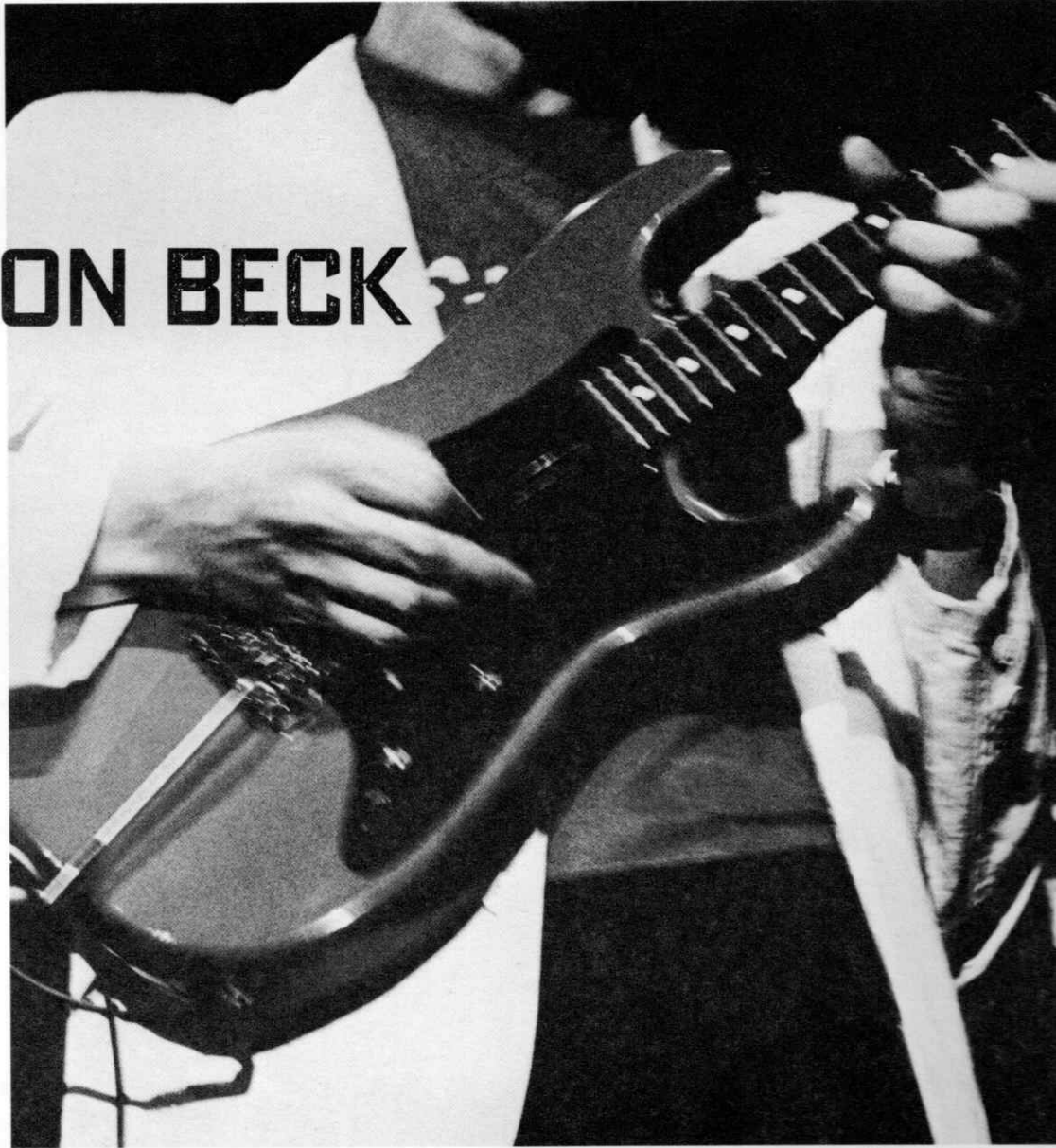


Photo by Kazumi

vocal
PAUL WILLIAMS

A

ザ・ホールズの音楽性、主観的に語ってみる。
魅力をこく

どうも初めまして、小川銀次です。

今回は再来日するオレもなかなか好きなギタリスト(?) アラン・ホールズワースについて主観を中心に書いてみようと思います。いきなり話はそれるけど、7を付けたのは、ハッキリ言って彼の場合すでに、ギターのある1つの限界を越えている気がするからです。あしからず/いいものを持っていながらなかなか脚光をあびないギタリスト、海の向こうでは人気があるが日本では名前すら聞くことのできないギタリスト、またその逆で日本でしか人気のないギタリスト……まあ簡単にいうと、いいものを持っていながら売れないギタリストというのが、けっこうたくさんいるのです。今はしっかりと前線にもどった感じのアラン・ホールズワースも、さよっと前まで、いや、初来日するまではそんなギタリストの中の1人でした。

オレが初めて彼の演奏を聴いたのは、たしかイアン・カー&ニュークリアスの「ベラドナ」かテンベストの「テンベスト」のどちらかだったと思う。なんせ、ギターを始める前のことだったからよく覚えていないのだけど、その頃ギターを弾いていないオレが聴いても、彼のギターから出てくる流れるようなフレーズがやけに新鮮だったのを覚えている。今日までスポット・ライトを浴びずにいたのは、その独特なギターゆえと思えるフシがある。それとひとつのバンドに長居できない彼の前進を好む性格が原因だったのではとも思える。一時、海外ニュースなどで彼の名前をみつけるとどこそこのバンドをぬけたとかばかりで、いちばん最低な記事では、子供のミルク代のために、ギターなどの機材を全部売り払ったなどと、とんでもないプログレ雑誌に出ていたり……。まあ前線に復帰して、日本でもステージを観ることができるようになった今となっては笑い話になったと思うけど。

まあ前置きはこれくらいにしてオレの主観を中心に彼の経歴を追いつつ書いていこうと思います。まあ、スペースの都合もあるのでどこかで盛り上がり過ぎて最後までたどり着く心配ではあるが、まあ、付き合ってください。

彼は1948年にイギリスのヨークシャー州に生まれた。ヨークシャーとゆえば、あのジョン・マクラフリンもその出身なのです。このふたり、年齢が違いうしろ、そしてパターンが違うにしろ、けっこう似ている部分もあるのです。ホールズワースのオヤジさんはピアニストだったそうで、彼にクラリネットかギターを弾くことをすすめたらしい。結局彼はギターを選んだのだけど、そういった環境の中だったから、オヤジの影響もあって、彼はいろんなジャズ・レコードを聴きまくったのです。ギタリストとしては、チャーリー・クリスチャンとか、やっぱりジャンゴ・ラインハルトとか、それに土地がら、ジャズっぽいブルースなど。そして、これこそ土地がらで、ブリティッシュ独特のトラディショナルなフォークみたいなものも聴いていたのではないかと



思える。そんなこんなしている内に1969年に、「イギンボトム・レンチ」とかいうバンドで、一応、プロとしてのデビューをしたのである。オレはホールズワースのレコードはわりと聴いているけど、このレコードだけは、今だかつて聞いていない。そうこうしている内に、前出のアルバム、イアン・カーの「ベラドンナ」に参加したのです。このアルバムでの彼の演奏は、わりとあたえられた中でけんめいに演って、とても好感がもてる。なんというか非常にストレートで、なおかつ、この頃から今のスタイルを築く土台みたいなものは、あったような気がする。

そして、ほぼ同時期に彼は、ジョン・ハインズマン率いる「テンベスト」に参加した。その当時はこのテンベストもいわゆるハード・ロック・バンドであったのだけど、何かが違っていたのです。それまでは、割とチョーキング一発、いわゆるタメっばいものとかが主流だったのだけど、このバンドのギター「アラン・ホールズワース」は音が流のように流れていて、すごく新鮮なものがあってのものである。ホールズワースのファンの人にはぜひ、聴いてもらいたいアルバムである。

そして、そうこうしている内に、何とこのバンドにもうひとりギタリスト、「オリィ・ハルソール」というおもしろい奴が入ってきたのです。この人は、その前まで「バトゥー」とゆうバンドでやっていた、かなり独自の物を持った奴でした。この頃のイギリスのB. B. C. のライブ・テープを持っているので、今、あらためて聴いてみると非常におもしろい。この頃はホールズワースはまだアームを使ってなく、オリィが今のホールズワースの原点になるようなアームの使い方をしていたのが非常におもしろいのである。のちのちのホールズワースがどこかの雑誌のインタビューで、アームの影響はジミ・ヘンドリックスよりもオリィ・ハルソールの方が大きかったと言っているが、何となくわかる気がする。オレはジミヘンの大ファンだけど、どう聴いてもオリィ影響の方が大きいと思える。このふたりの出会いが、



Photo by Sho Kikuchi



ホールズワースの現在のスタイルのひとつの原点になったことは間違いないと思う。なお、現在との比較において、今でも一緒にやっているボーカリスト“ポール・ウィリアムス”の存在もわすれることができない。なかなかの親友なのだと思う！

そして、そうこうしている内にアランはバンドをやめて、新しい活動に入ったのである。そして、1973年か74年にあの“ソフト・マシン”に加入したのである。そして、レコード・リリース前にやめてしまったらしいのだけど、レコード『収束』はリリースされたのである。このアルバムにおける彼のプレイは今聴いてもスゴイと思える。全編における弾きまくりなど、思わず「誰のバンド?」と思ってしまうほどスゴイのである。テンペストとこのアルバムは、けっこう聴きまくった覚えがある。どうもアリガトウ！

そして、良いのか悪いのかわからないけど彼はまた前に進んだのである。一回だけセッションしたあのベーシスト“アルフォンソ・ジョンソン”の紹介で彼はあの地下鉄工事ドラマー、“トニー・ウィリアムス”の新しいバンド“ニュー・ライフタイム”に走ったのです。ちょっと、話は前後するが、今はステファン・グラッペリの所でジャズっぽいことをやっているが、ソフト・マシンでのホールズワースの後釜に入ったジョン・エサリッジとゆうギタリストもホールズワースの流れをくんでいてなかなか好感が持てる人である。話を元に戻すと、このニュー・ライフタイムで彼は2枚のアルバム(『ビリーブ・イット』と『百万ドルの足』)を残している。2枚目における彼のプレイは悲惨そのもので、何となく薬物でもやっていたのではと思ってしまうほどなのだけれど、1枚目の方は、とてつもなくパワフルで、のびのびと弾きまくっていてなかなかいいのである。確かにスゴイ演奏なのです。そして例によって、再び前へ進んでいく。

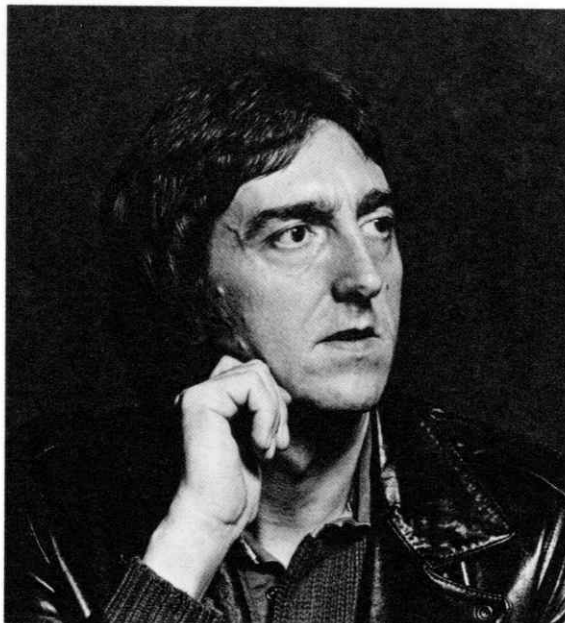


Photo by Sho Kikuchi

ちょうどこの1976年にCTIと単発契約で初のソロ・アルバム『ベルベット・ダークネス』を出すのですが、本人も言っているように、音は悪いし、1日か2日で録ったものをリリースされたとうとうんでもないもので、本人に気をつけてこの件はふれないように……。

そして、この出来ごとが物語るように彼はあの“ゴング”、そして“ブラッフォード”、そしてあの名バンド“U.K.”、そしてまたブラッフォード、ゴング、さらにソフト・マシンとゆうように活動を続けていったのですが、たぶん彼にとってそれは単なるセッション以外のなにものでもなかったような気がするのです。とゆうのも彼はそれらと並行して、いわゆるブリティッシュ・ジャズとゆうか、ヨーロピアン・ジャズとゆうものに深く入りこんで自分の音の追求にはげんでいたからです。確かに、彼のU.K.やブラッフォードにおけるいくつかのプレイは思わず「やったね!」といってしまうほどスゴイものがあっただけで、この頃すでに、自分の演りたいことが見えてきそうな段階だったのだ。

この時代がホールズワースのいわゆる一番売れなかった時代であり、半面おもしろかった時でもあると思う。1977～1980年までにこのフリー・スタイルっぽいジャズ・アルバムを5枚(ジョン・スティーヴンスの『リ・タッチ』、『タッチング・オン』そしてゴードン・ベックとの『カンパセイション・ピースI&II』、『サンバード』、『ザ・シングス・ユー・シー』)残している。これらにおけるホールズワースのプレイは、退廃的ななかにも挑戦的な面があるような気がする。なかでも、ゴードン・ベックとやっている3枚のなかに現在のホールズワースの影がチラつくのである。そしてそのなかでも、『ザ・シングス・ユー・シー』は特にいい出来だと思う。本人はどう思っているかわからないが、このアルバムはハッキリ言ってスゴイです。それと本人も言っているように、やりたいことをやれた最初のアルバム『I.O.U.』の原型やそのアルバムにも入っている曲などをすでに演っているのです。このアルバムは、ほぼ全編アコースティック・ギター中心ではあるが、それだけにパワフルで、なおかつ素朴な面が出ていいのです。このアルバムもだいぶ聴かせてもらいました。

そして、そうこうしている内にあの名作『I.O.U.』が出たのです。オ——っと、忘れていたけど、そんなこんなの中に、あのジャン・リュック・ポンティの最高傑作『秘なる海』にも参加しているのです。そして『I.O.U.』に話を戻すと……。

このアルバムは、オレのマブ達の海の向こうの外人から送ってもらったのであるが、久しぶりのホールズワースの本気とゆう気がしたアルバムだったのです。ウワサではこのレコードの録音のために、だいぶ機材を売り払った(前にも書いたけど)らしく、そのことをとりのぞいても、

Photo by Kazumi Okuma

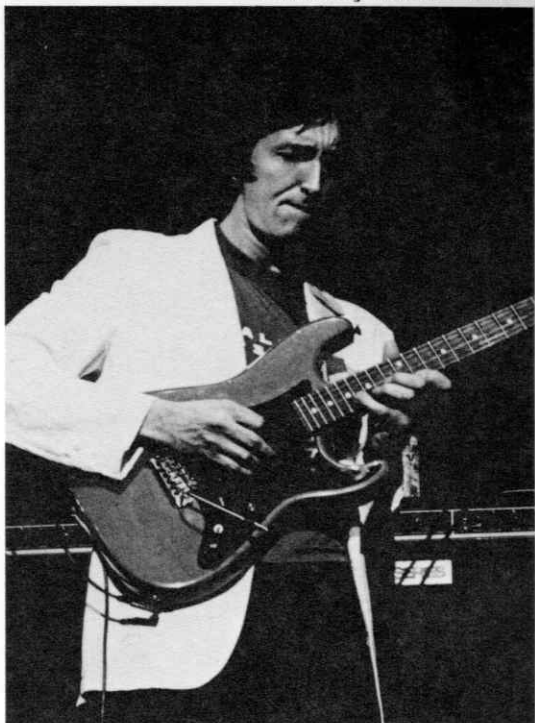
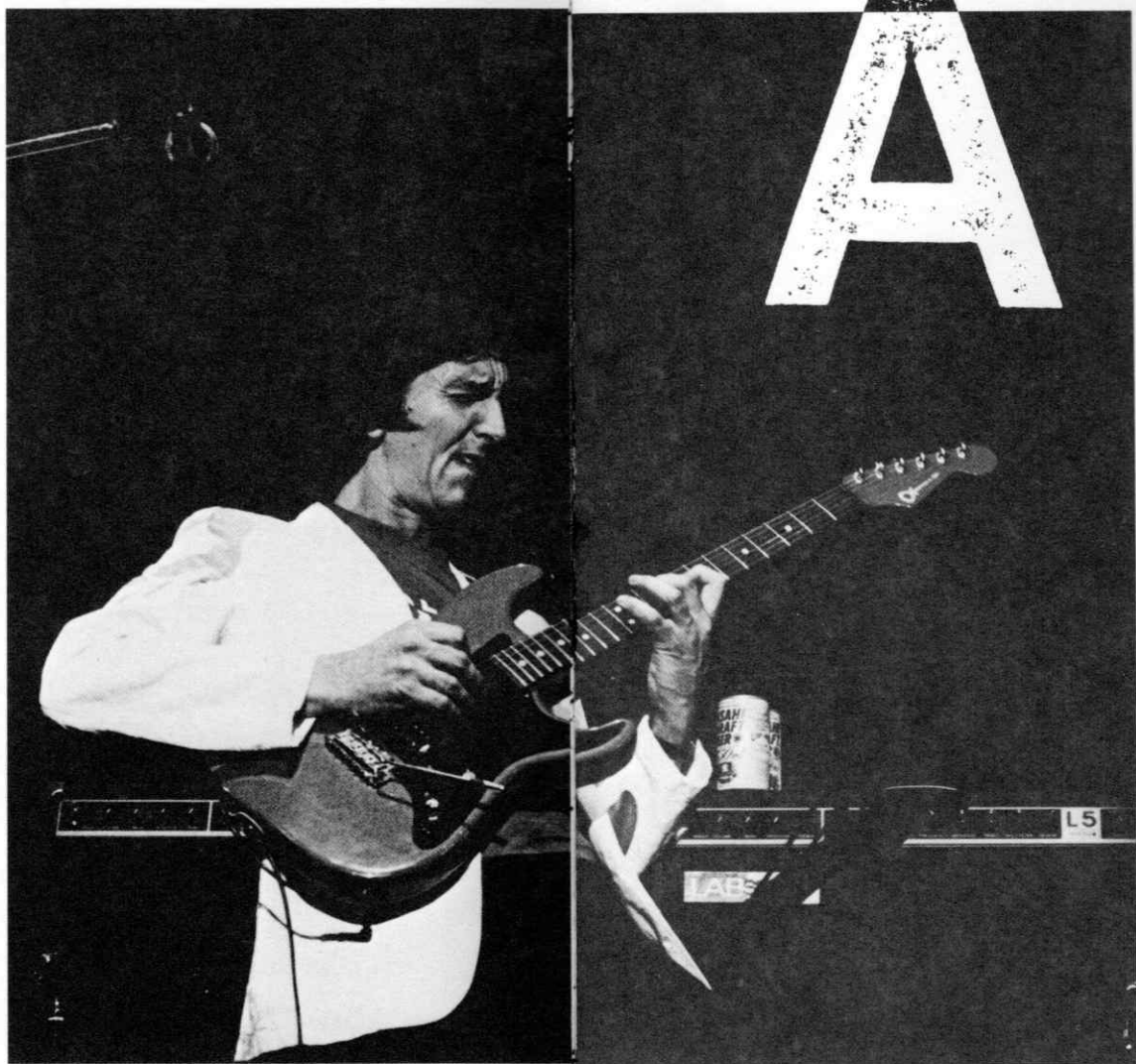
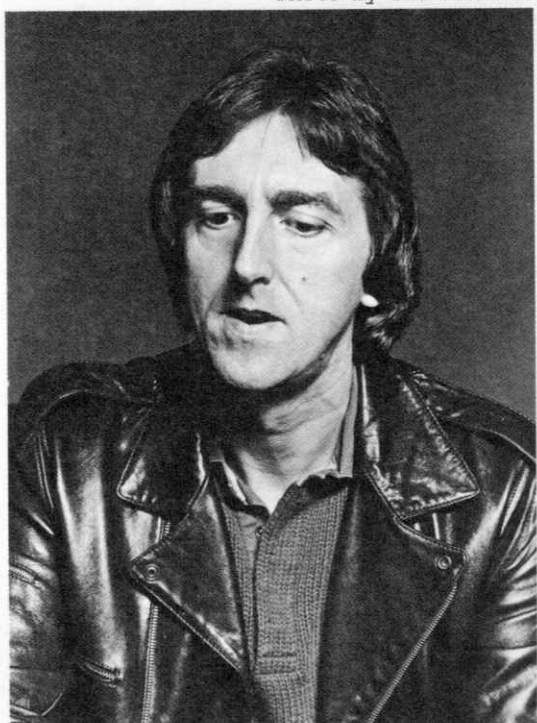


Photo by Sho Kikuchi



N

熱いパワーがひしひしと伝わってきたのです。ホールズワースといえば、ギター・ソロみたいな面が多かっただけにこのアルバムではギター・シンセを使っていないとゆうこととキーボード奏者がいないとゆうことが、かなり心地のよいショックでした。ここへきて、ワーナー・パイオニアからこのレコードが復活されるらしいけど、とにかくスゴイ内容でした。オレ自身、このレコードが海の向こうの外人から送られてきた時は、くる日もくる日も、1週間位ショックっぱなしでした。自主制作にしては、美しいコードの響きや、パワフルなプレイ、そして、ドラムのゲイリー・ハズバンドやベースのポール・カーマイケルの見事なフォロー、そして、なんともなつかしい、あのテンペストの頃の友人、ポール・ウィリアムスの歌声、何をとってもゾクゾクとさせられました。

そして、再びそうこうしている内に、旧友ジャン・リュック・ポンティの『インディヴィジュアル・チョイス』(1983年)に2曲ほど参加して、ほぼ同時期にあの、エディ・ヴァン・ヘイレンとテッド・テンブルマンの最悪コンビの助けにより、ミニ・アルバム『ロード・ゲームス』が発売されたのである。ここで聴けるプレイは、『I.O.U.』の延長ではあるのだけど、数段音的に良くなって聴き易い反面、パワー全開とゆう感じではなかったような気がする。あのブラッフォード時代の強力ベース・ギタリスト、ジェフ・バーリンとオレがジミヘンと同じ次元で好きなフランク・ザッパの所にいるシャド、ワッカーマン、そして、なつかしいあのジャック・ブルースなどの協力でなかなかのものぞはあったのだが……。

そうこうしている内に、ついに待望の初来日を1984年4月に果たしたのである。

アルバム『ロード・ゲームス』でのメンバーで来るはずであったが、期待のジェフ・バーリンは来なかったので、全国ベーシストたちはガッカリしたみたいだけど、それでもオレ個人としては、とってもウレシかったとである。とりあえず、30代半ばになってしまったけど、ついに陽の目をあびたことが、他人ごとのように思えずよかったのです。それに、ジェフ・バーリンのかわりに来たジミー・ジョンソンとゆうベーシストも、これぞベーシストみたいなフォローがあって好感がもてたとゆうか、安心して聞けたことがとてもよかったのです。それに、チョコっとだけ本人と話す機会があったし……。まだ、オレのことをおぼえてくれるかなあ？

まあ、そうこうしている内に話は佳境に入る。なんと、早くも待望とニュー・アルバムが入ってきたのである。そして『I.O.U.』もメジャー発売が決まり、時を同じくして再来日が決定したのである。

ニュー・アルバムはもう聞いた。すでに、とある何とかマガジンとゆう雑誌に原稿を書いていたので何だけど、

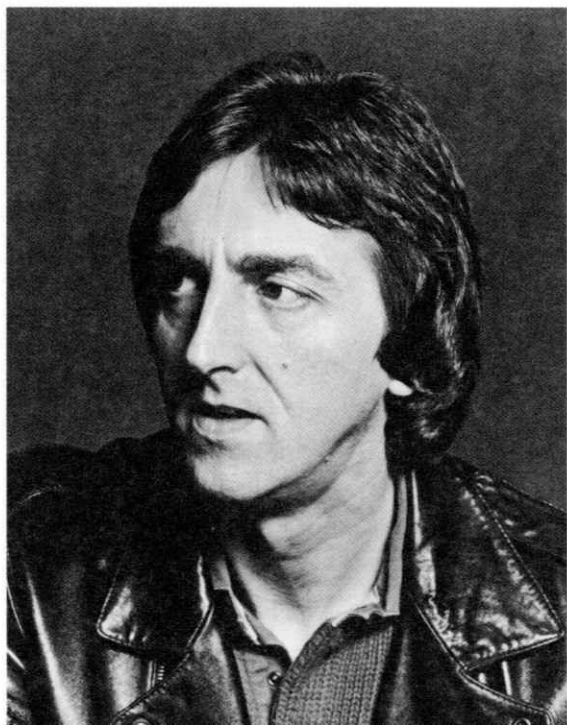
かなりスゴイ出来でした。それに、選曲の仕方が日本人っぽくて笑ってしまいました。

さて、今度の来日メンバーは、ハッキリとはわからないけど、前回とほぼ同じではないかとウワサされています。それとあくまでウワサのなかのウワサではあるけど、あのピアニスト、ゴードン・ベックが来るのではとゆう、とんでもないウワサもあるようです。ぜひ、来て欲しいと思う。2人のデュオなんか、絶対、聞きたいし！

まあ残りも少ないこそだし、最後のツメといきたい。最初の方で書いたように、良いものを持っていながら、いろんな事情で売れなかったアラン・ホールズワースがここまでやってきたのです。再来日にあたって、再び非常に期待しています。

彼のギター・プレイには、確かに、チャーリー・クリスチャンやジャンゴ・ラインハルトのようなものがあるような気はする、そして、出身が同じマクラフリンや、パット・メセニーなどの影響もあるように思えるし、はたまた、コルトレーンやパーカーなどのホーン・プレイヤー的な部分もあるし、言い過ぎかもしれないけど、あの“ラヴェル”や“ストラビンスキー”的な面も感じられるのである。

とにかく前綿復帰した“アラン・ホールズワース”にオレは大きな期待をしている。それに、彼の生き様を見ると、オレにもまだまだチャンスがいっぱいあるような気がしてならないのである。



W

ORDS

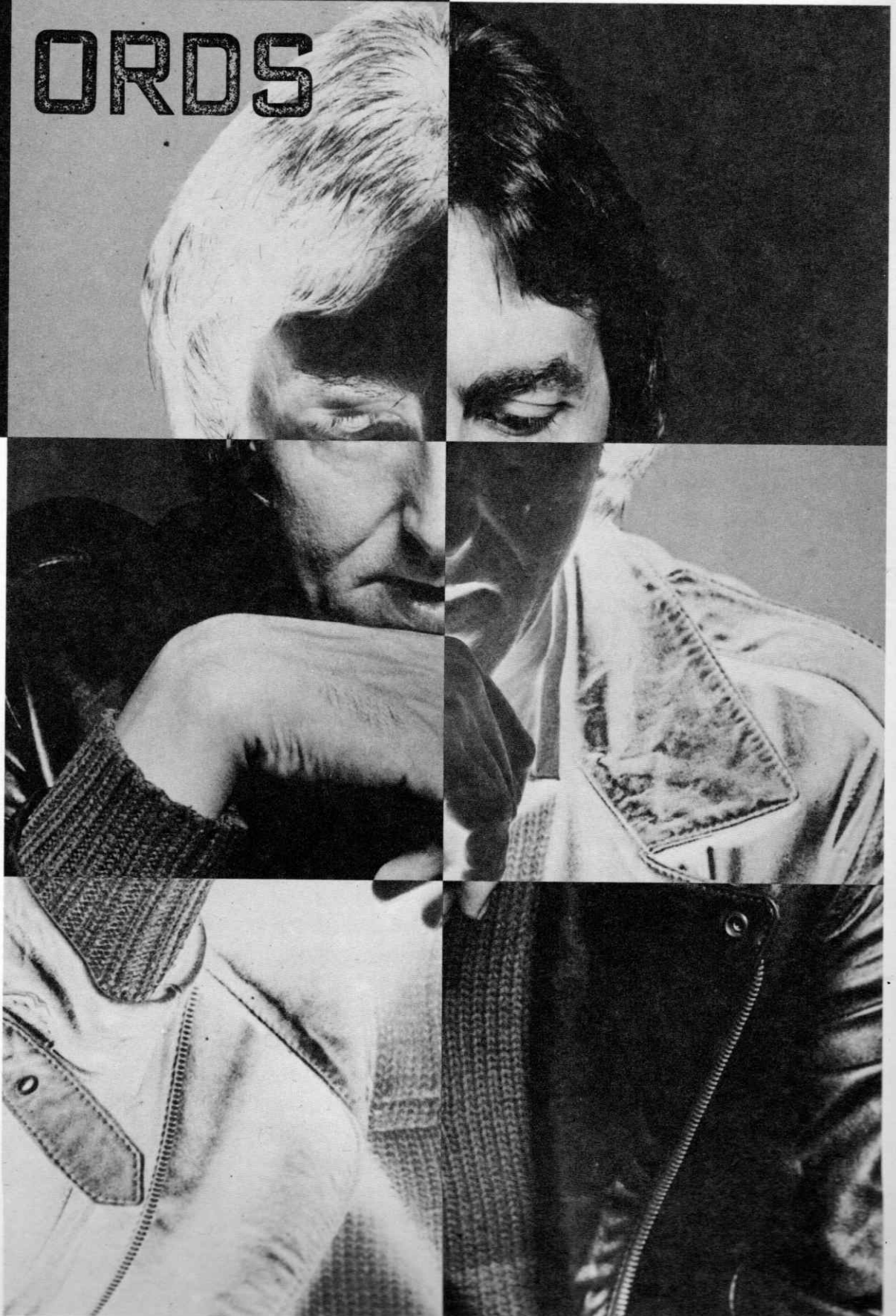


Photo by Sho Kikuchi



Photo by Kazumi Okuno

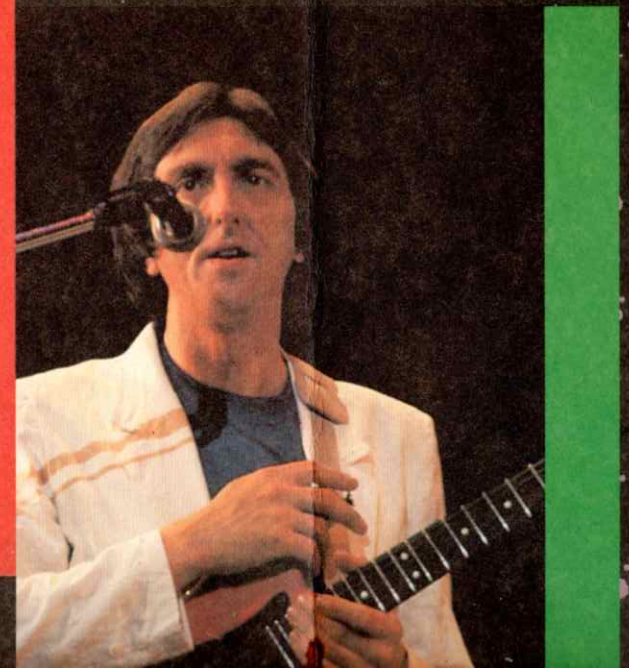
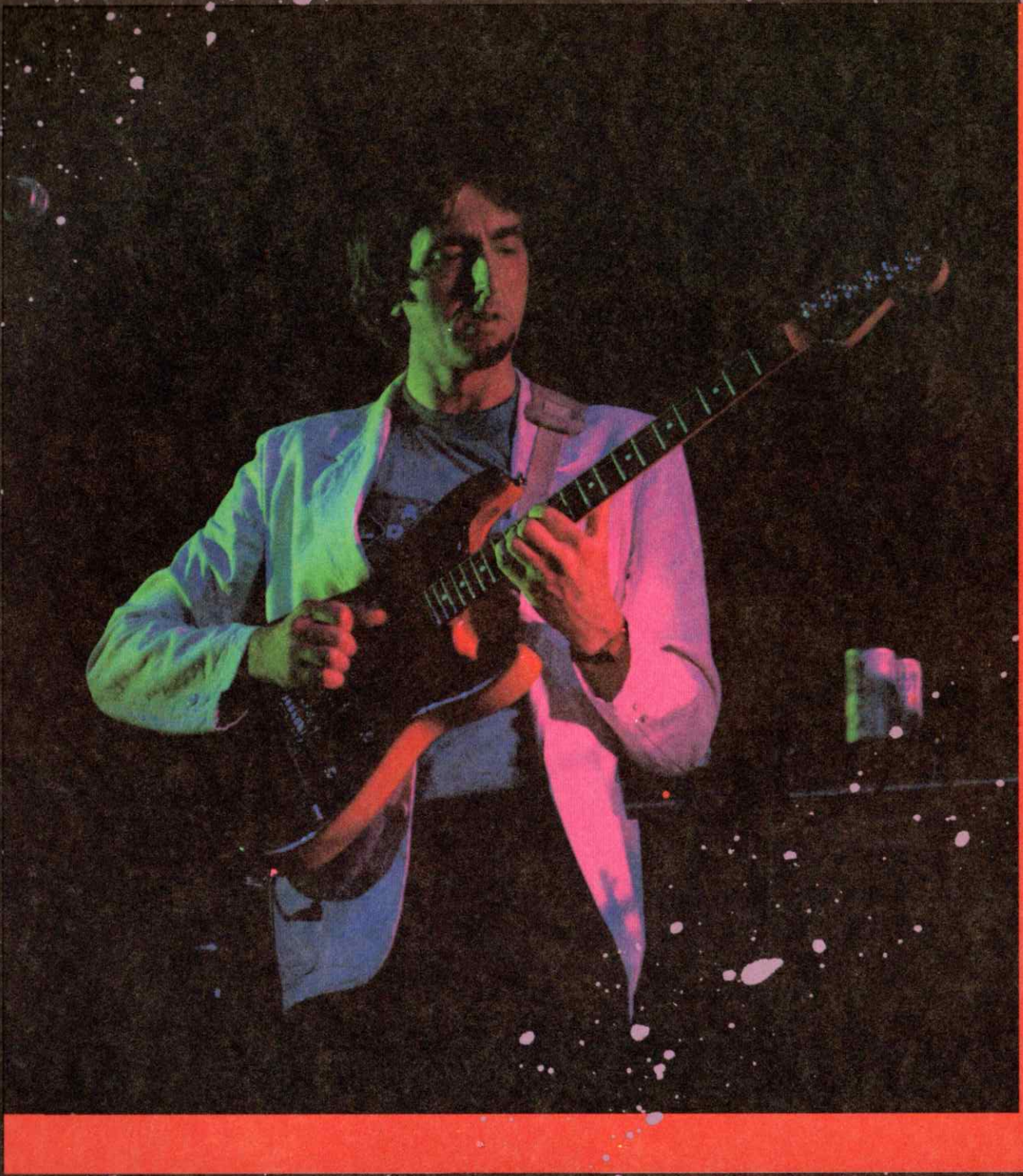


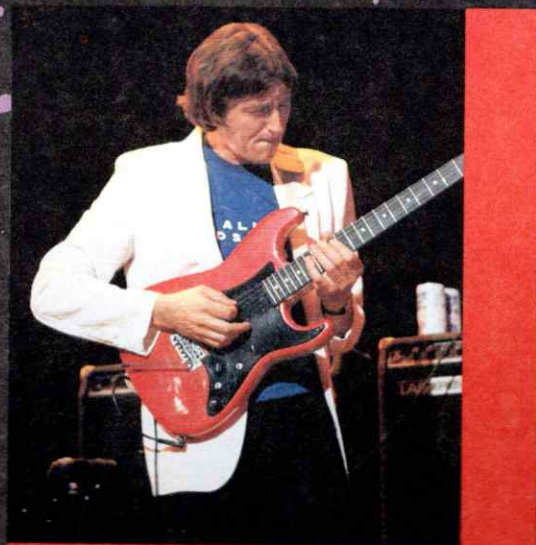
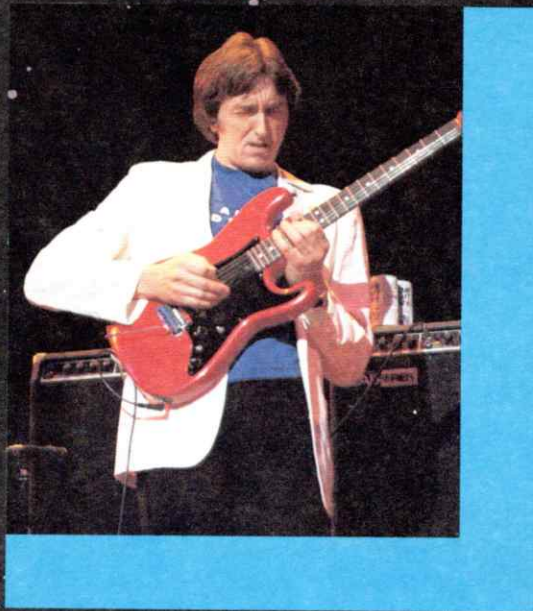
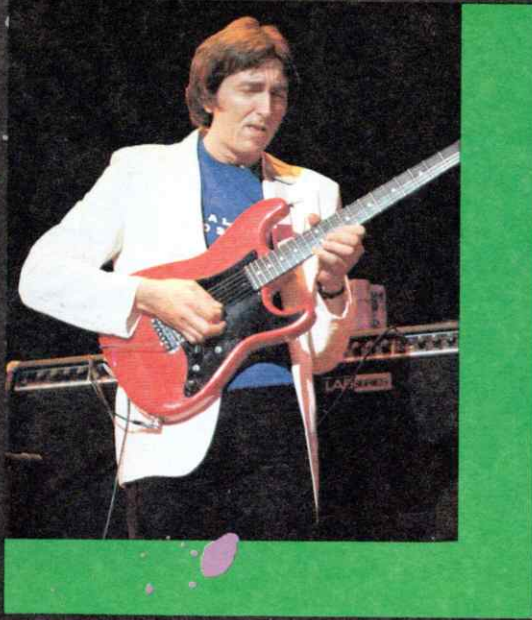
サウンドはどれも大切だが、楽器は単なる道具にすぎないから、ギターを弾かなくても、アンプやオーリンなども、楽器はなんでも、なんでも、問題はどんな音楽をプレイしたいかだ。

僕はビートルズのアーティストたちから使うアンプとは違った方法で、彼らと同じくらい、アンプをいじって、楽しんでる。

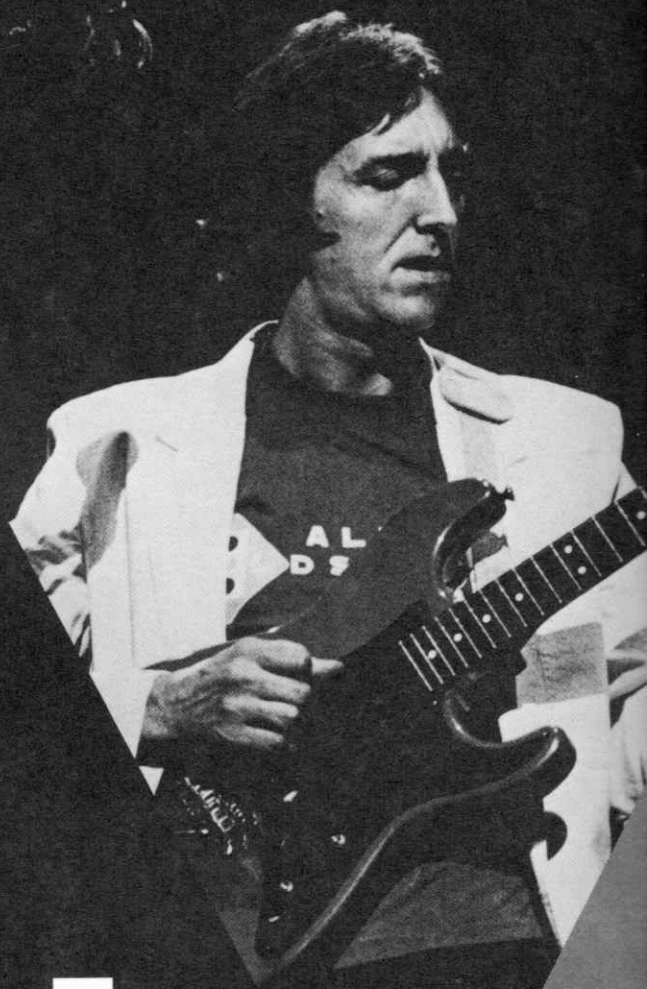
音楽をやっていると、どうしても重要なものは、それを通して何かを伝えたいものがあるように感じる。そういうことだ。もちろん、プレイがうまくいけば、それは表現力が豊かになることは、事実だ。

ジョン・コルトマンやキヤリー・パーカーからは大きな影響を受けたが、それは精神的な面でのことだ。僕は、好きなプレイヤーがいたとしても、アンプやギターといった絶対には思わない。テクニカルよりもスピリットやフィーリングを重視して、あがる。





EQUIPMENT



84年来日時の写真や過去のインタビューなどを参考に
して、アラン・ホールズワースの使用楽器、ステージ・セッ
ティングを紹介してみよう。

◎メイン・ギターは、レッド・フィニッシュのシャーベル製
ストラトキャスター・タイプ。これは、シャーベルのデザイ
ナー、グローヴァー・ジャクソンがアランの意見をほぼ100
%取り入れて製作したもので、ネックにはメイプル、指板
にはエボニー、ボディにはバスのウッドが使われている。ピ
ックアップはブリッジ側にカスタムメイドのセイモア・ダ
ンカンがひとつ。コントロール類は1ボリューム、1ト
ーン、それに、2系統に分かれたアウトプットをセレクト
するためのスイッチとトーンをブライツにするためのス
イッチ、という構成。ネックの幅はヘッド寄りギブソン
と同じ、ボディ寄りが2¼インチとなっているが、これも
彼のアイデアによるものだ。グローヴァーは、アランの
ために、他にも何台かのストラト・タイプ・ギターを製造
している。

◎初来日のステージには、3台とエフェクツ・ラックが置かれていた。詳しい接続順などは不明なので、その内容だけを紹介すると、まず1台目にはdbxのコンプ/リミッター、ヤマハのプリアンプ、イーブンタイトドのハーモナイザー、MXRのデジタル・ディレイ、ヤマハのアナログ・ディレイ、A/D Aのデジタル・ディレイ、レキシコンのデジタル・ディレイ、MXRのピッチ・トランスポーザー、2台目にはパースのプリアンプ、A/D Aのデジタル・ディレイ、AMSのコンピュータ・コントロールド・ステレオ・デジタル・ディレイ、ハーレイ・トンプソンのプリアンプが2台、同じくハーレイ・トンプソンのメイン・アンプ、3台目にはMXRのピッチ・トランスポーザー、メーカー不明のプリアンプとメイン・アンプ、となっている。他にヤマハの12chミキサー、ボスのCE-1、2台ヴォリューム・ペダル（1台がギターとエフェクツ類の間、もう1台がエフェクツ類とアンプの間）、スイッチ・ボックスなどが使われていた。◎アンプは、もちろんステレオ・セッティングで、LabのL-5とマーシャルのスピーカー・ボックスが、それぞれ2台ずつ置かれていた。

Photo by Kazumi Okuma



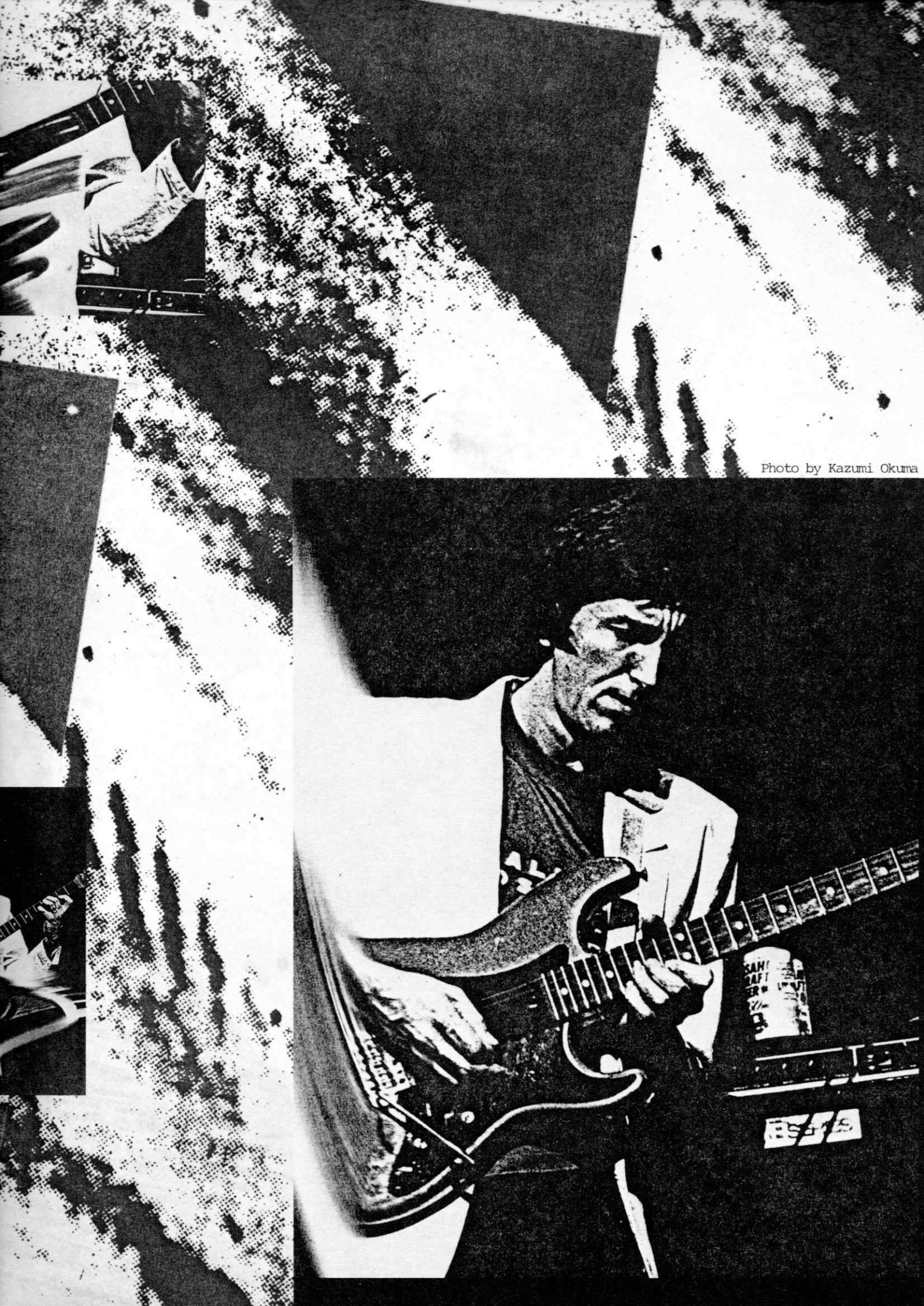
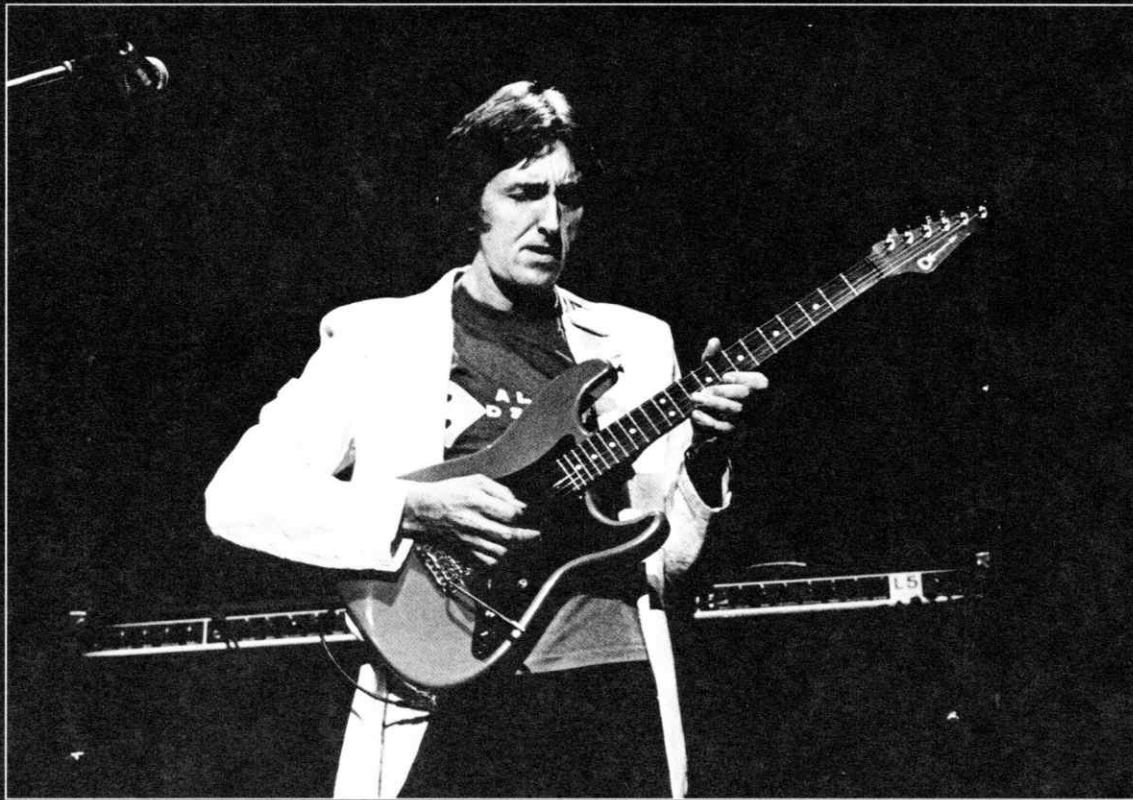


Photo by Kazumi Okuma





Presented by ONGAKUSA